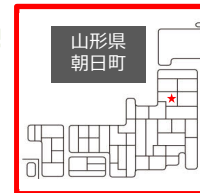


5 りんご産業を中心とした、人材確保、園地の継承、地域農業の振興（山形県：朝日町全域）

事業のポイント

地域おこし協力隊制度を活用し、町と共同で新規就農者の公募、県などの関係者を含めて樹園地継承の仕組み検討、講演会（地域農業の発展のための園地整備について）の実施、農業経営におけるIT・デジタル情報活用の取組、機関誌の発行及びSNSによる地域資源等の魅力発信を実施した。



基本情報

あさひりんごの郷協議会 （山形県朝日町）

【協議会構成員】

朝日町農業研修生受入協議会、朝日町、朝日町若手農業者の会、朝日町農業委員会、朝日町農業士会、朝日町果樹組合連絡会議、J A さがえ西村山

【実施地域】朝日町全域

【主産業】農業

主要作物等：りんご、米

体制図

あさひりんごの郷協議会

事務局

（各種支援制度、補助事業の活用）

移住就農事業部会

（新規就農者など人材確保に関する事業）

樹園地継承事業部会

（樹園地の継承促進に関する活動）

活動計画策定部会

（地域農業の振興、企業の連携、交流事業、ITデジタル情報活用に関する活動）

取組の概要

取組内容（R4～R6）

(1)活動計画策定

- ・優良な樹園地を継承していくための実態調査
- ・移住就農促進支援策の検討
- ・人材確保に向けた公募事業活動の検討
- ・農業体験受入れ事業活動の検討
- ・農地の権利移動と中間管理のしくみの検討
- ・企業との連携、協力、交流事業の検討
- ・地域農業（りんご）の持続的発展の取組みの検討

(2)体制構築及び実証活動

- ・地域（産地）の課題や対応の必要性を共有する地域内団体を構成員とする「あさひりんごの郷協議会」を設置し、実効性のある活動を展開する。

(3)専門的スキルの活用

- ・農業経営におけるIT、デジタル情報活用の取組
- ・ホームページやSNS等を活用した情報発信、普及啓蒙



朝日町りんごまつり



ワークショップ

対策の効果

対策前(課題)

- 高齢化や担い手不足が進行、労働力不足、生産者減少に歯止めがかからない厳しい状況を食い止めることが課題となっている。
- りんご産地の存続が危ぶまれる。



対策後(効果)

- 担い手確保のため町と共同による新規就農者の公募による地域おこし協力隊の応募2名、農業研修生1名の従事があった。
- 樹園地継承の仕組みの検討、地域農業の発展のためのワークショップを実施し、地元生産者の課題意識の共有を図った。

2020農林業センサ
朝日町の基幹的農
業従事者数及びりん
ご経営体数の大幅減

農山漁村振興交付金
活動計画策定事業の
活用

2021年

事業取組のきっかけ

朝日町のりんごは、中規模ブランド産地として高い評価を得てきた。しかし近年、地域の高齢化が著しく、後継者不足のなか離農と樹園地の縮小・廃止が進み、産地の活力が弱まって地域全体の過疎化、活力低下に拍車がかかっている。
地域及びりんご産地の共通課題は、りんご経営に携わる人材確保である。その対策として、都市地域等からの移住促進を図り、優良な樹園地を継承させ移住就農できる仕組みを目指したことがきっかけである。



朝日町内りんご園

2022年

事業開始1年目（取組実績）

- あさひりんごの郷の活動計画の策定
- 里親農家の会発足
- 優良な樹園地を継承していくための調査・検討等（アンケート）
- 人材確保のための移住就農、受入体制整備の検討（会議の開催）
- 農業経営におけるIT、デジタル情報活用の取組み（データサイエンスワークショップ開催）
- 情報発信、啓発：あさひりんごの郷便りの発行（2022.12創刊）、○先進地視察の実施

2023年

事業開始2年目（取組実績）

- 新規就農者の公募事業：1名の地域おこし協力隊
- 農地継承の仕組み検討：会議、ワークショップの開催
- 地域農業継承をの振興、発展：講演会、セミナーの開催
- 樹園地継承を公募する仕組みの構築
- 農業経営におけるIT、デジタル情報活用の取組



短期農業体験

2024年

事業開始3年目（取組実績）

- 樹園地継承の仕組み検討：会議、ワークショップの開催
- 農業経営におけるIT、デジタル情報活用の取組
- 地域農業の振興、発展：講演会、セミナーの開催
- 新規就農者や研修生の人材育成対策として「りんごの郷みらい塾」を開講（里親農家の会主催）
- 都市からの移住者・就農者数：3人（対前年度比150%）
- 優良園地からの中間管理、譲渡等面積6.1ha（対前年度比508%）
- 都市地域企業等との連携：2企業（対前年度比100%）
- ロンバス方式の普及面積：1.4ha（対前年度比352%）



りんごの郷みらい塾

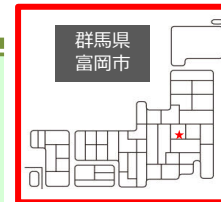
2025年～ 今後の展望

地域の活性化、自立、維持発展

- ・産地の最大の課題である担い手不足が解消することで町の主力産業であるりんご産業が活性化する。
- ・移住や都市との交流が増えることにより、地域内で自立的に様々な交流活動、コミュニティ活動が誘発されていく。
- ・産地が維持されるだけでなく、人材交流等により更なる発展に向けて生産性の向上やブランドの確立を目指す。
- ・りんごの新規就農者の獲得や樹園地継承のIT化等データサイエンスを取り入れた、山形大学との継続的取組みによる課題の解決を目指す。

事業の
ポイント

地域住民が「蚕の魅力」を生み出す体制を支援、養蚕が魅力ある農業であることをサポートした。
また、養蚕が生み出した「冬虫夏草（カイコサナギタケ）」の富岡ブランドづくりを図った。



基本情報

養蚕Park実現協議会
(群馬県富岡市)

【協議会構成員】

個人の養蚕経験者6名
桑の恵ま〜ゆ
富岡市

【実施地域】 富岡市全域

【主産業】 農業

主要作物等：養蚕、米、野菜（多種少数）

体制図

養蚕Park実現協議会

交流拡大促進

(都市と農山漁村の人々が交流するための取組)

定住安定促進

(都市住民が農山漁村に定住し引き続き住み続けるための取組)

組織基盤の統括

(協議会運営の総括、ワンチームで推進のための合意形成活動の推進)

取組の概要

取組内容 (R4~R6)

「稼ぐ養蚕プロジェクト」、活力ある養蚕拠点を実現する



耕作放棄地開墾
「桑の木植樹」



養蚕体験者
「毛羽取り」



繭クラフト体験
「繭の花づくり」



COCONの祭典
「繭クラフト発表会」

「稼ぐ養蚕プロジェクト」、「無」から「有」を生み出す

くず繭

さなぎ取出

玄米とブレンド

冬虫夏草



対策の効果

対策前(課題)

○富岡製糸場を核としたまちづくりや農業や工業を盛んにして住民が住み続けたい町を目指す取組が必要である。

○繭製品等地域産の食材をより多く取り入れ、地域に根ざした食育の視点での取組が必要である。

○地域に誇りと愛情を持つ子ども達を育むこともとても重要課題で、「カイコ」に親しむ機会の充実を図ることも必要である。

対策後(効果)

○都市部からの養蚕業への関心の高い人たちと地域住民との交流や意見交換を開催したところ3年間で3千人の関係人口が増となり効果があった。

○繭クラフト製品開発、食品類においては4製品を開発し都市部イベントで販売するなど地域に根差した無取組みを行い効果を上げた。

○養蚕体験者をSNS等で募集し、3年間において約350名が桑取、飼育、観察等の体験者を迎えることができた、7年度200名都市部から迎えることができ効果があった。

観光客減少
養蚕農家高齢化
繭生産量激減
耕作放棄地の増加
地域活力の低下

農山漁村振興交付金
活動計画策定事業の
活用

富岡市観光課から開
催場所の提案を受け
「旧葎塚製糸場」に
て第1回「COCON
の祭典」を実施

耕作放棄地・荒廃地
の開墾にあつては、
都市部若者の支援、
桑の木植樹にあつて
は地域の子供たちの
支援を受けて初期の
目的を達成

身近な有用資源を見つ
け出しSNSにて体験
者募集を行い成果を上
げる

「蚕の魅力」を生み
出すことが信州大学
繊維学部の支援で開
発できたことは大き
な財産となる

2020年

事業取組のきっかけ

昭和50年代後半から養蚕農家の高齢化や収益性の低さ等により養蚕農家が減少し昭和43年に3010戸の養蚕農家で1441トンあった繭生産量が、平成26年には12戸の養蚕農家で約4.2トンへと激減し、それに伴い桑園が耕作放棄地となり、荒廃化が進行し危機的状況に直面している。富岡製糸場への観光客も減少傾向が続き令和3年度は233千人となっている。

2022年

事業開始1年目（取組実績）

- 都市部住民等との交流人口を目的としたイベントを開催
- 都市部との交流イベント「COCON（繭）の祭典」を開催
- 「みどりの里」づくりは若者等との交流活動場として実施

2023年

事業開始2年目（取組実績）

- 都市部住民等との交流人口を目的としたイベントを開催
- 養蚕飼育体験、農業体験・収穫体験をを実施し地域住民との交流を行った
- イベント等の情報をSNS発信及びPRチラシ作成により行った

2024年

事業開始3年目（取組実績）

- 都市部住民等との交流人口を目的としたイベントを開催
- 観光養蚕を活用した地域資源の季節的な山野草や林産物等の「タケノコ、ワラビ、ふき、タラの芽」等の収穫イベントを実施した
- 「無」から「有」を生み出す取り組み 冬虫夏草(サナギタケ)を生み出した(富岡ブランド)

2025年～ 今後の展望

「お蚕の魅力」で稼げる養蚕

- ・「お蚕の魅力」から生み出した冬虫夏草(カイコサナギタケ)の生産センターを設置し収益を上げられる体制づくりを構築する
- ・養蚕体験者等に「蚕の力」を知っていただき、富岡製糸場への観光立寄地として活用、地産地消型の食材を使って「おつきりこみ・ホルモン揚げ・小野つみれ汁」等提供し利益を得る体制が確立された また、冬虫夏草を食材として取り入れることで付加価値食となる(薬膳料理)



荒廃化した桑畑



第1回COCON祭典



養蚕 桑取体験



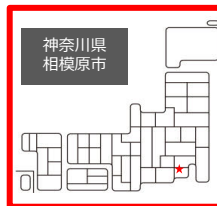
竹の子狩り体験



冬の虫夏草 生産試験

事業の
ポイント

農業・畜産生産者を中心に、加工や観光などの6次産業化をベースとした交流事業を推進し、地元の農業振興を図り、相模原市が掲げる「人・自然・産業が共生する 活力あるさがみはら」の実現を目指す。



基本情報

相模原新都市農業推進協議会
（神奈川県相模原市）

【協議会構成員】

株式会社ゆうゆう農場、大沢幼稚園、OHANA幼稚園、森農園(陽だまり作業所)、こだわり苑、さがみ夢農園、相模原市

【実施地域】相模原市緑区田名地域

【主産業】 農業 主要作物等：野菜

体制図

相模原新都市農業推進協議会

体制構築・構想検討部会及びPR等広報部会

地域協議会及び連携団体等全組織

6次産業部会

株式会社ゆうゆう農場、相模原市役所農政課等関係団体

農業生産推進及び農に親しむ取組推進部会

地域協議会構成員

新たな構想検討部会

地域協議会構成員

取組の概要

取組内容（R4～R6）

相模原新都市農業推進協議会

体制構築・構想検討部会及びPR等広報部会

・地域協議会及び連携団体等全組織

6次産業部会

・株式会社ゆうゆう農場
・相模原市役所農政課など関係団体

農業生産推進及び農に親しむ取組推進部会

・地域協議会構成員

新たな構想検討部会

・地域協議会構成員

・田名地区自治会
・大島地区自治会
・大沢地区自治体等の他営農団体へも参画要請

・株式会社ひだまり農園
・こだわり苑
・風月堂
・相模女子大学

・古泉農園
・神奈川野菜ソムリエの怪
・相模原サポートセンター
・相模女子大

・アグリモール準備委員会その他適宜連携団体への参画要請

対策の効果

対策前(課題)

○大都市近郊で経済および地理的条件に恵まれた、ポテンシャルの高い農用地区域であるが、農業の担い手は高齢化が進み、経営規模や経営力の脆弱化が懸念。

対策後(効果)

○非農家を含めた自由闊達な討議や、コミュニティ活動等により、魅力ある地域の方向の合意形成を図るべく地域の強みや弱みを把握。

○農業・畜産生産者を中心に、新規参入者の育成へ向けて、加工や観光などの6次産業化への方向性を見出す。

耕作放棄地の増加とそれに伴う乾燥土壌を発生源とする砂嵐の発生

2020年

事業取組のきっかけ

本地区は、周辺を住宅や工場に囲まれ安定兼業にも恵まれているが、農業の担い手の高齢化がすすみ耕作放棄地も出現してきている。折角の大都市近郊で経済・地理条件に恵まれたポテンシャルの高い優位性を生かし切れていない。これらの改善方法を模索し、地区全体で優位性を高めたいと考えた。



砂嵐

農山漁村振興交付金活動計画策定事業の活用

2022年

事業開始 1 年目（取組実績）

- 10,000人の入場者を越えたモニター販売を行い消費者の意向を把握し、地域の学童と父兄が参加した交流イベント、収穫体験会を実施
- 地元大学の協力を得て、ポテンシャルを活かした都市農業の拠点づくりの構想、都市住民等とのネットワークづくりの構想を策定した。



地域交流

アグリモールの基本構想案策定と組織の整備

2023年

事業開始 2 年目（取組実績）

- 田名地区の生産物を使ったスイーツ商品の販売活動により、地域の魅力のPRと地元産農産物の販売を促進し、6次産業化への施策を実施



収穫体験会

モデル事業の実施とその効果測定

2024年

事業開始 3 年目（取組実績）

- 収穫体験やマルシェでのマーケティングの結果、新鮮な地元産のブドウ、イチゴへの希望が多く、また手短な農業体験への希望が多かったことを踏まえ、アグリモールへの方向性、マネジメントの道筋を検討



6次化商品施策

引き続きモデル事業の実施と報告書の作成

2025年～ 今後の展望

「首都圏農業のモデルとなるアグリモールの実現

- ・6次産業化へ向けて高需要なブドウ、イチゴを加工販売すべく圃場の拡充をすすめ、並行して、情報技術を活用し会員制コミュニティを構築して、**プロシューマー型の加工品開発**、季節野菜の生産販売を行い、地域の活性化と賑わいのある新しい農業の在り方を、「**首都圏モデルのアグリモール**」として実現し都市農業の拠点づくりを目指す。



マルシェ・子ども食堂